

## 連載 プロマネの現場から

### 第 159 回 上海の魅力的な本屋さん「書店 4. 0」

蒼海憲治(大手 SI 企業・上海現地法人・技術総監)

昨年 12 月、上海において約 100 年の歴史を持つ上生新所(コロンビアサークル)に、日本でも有名な書店である「蔦屋書店」がオープンしました。コロンビアサークルの敷地内にある、当時駐在米国人の社交場として使われていた洋館、コロンビアカントリークラブを当時の内装を残して改装し、書店を開業しました。この洋館は、上海市の優秀歴史建築にも選ばれており、とても美しく、コロナ禍でのオープンであったにもかかわらず、4 日前までに予約しないと入場できないほど大盛況でした。

中国に赴任して 2 年目に入った当時、読書のスピードに対して日本語の書籍が自由に手に入らなくなったため、中国での読書ライフは AMAZON の電子書籍が中心となりました。そのため、現在、日本語の本の入手方法としては、AMAZON での電子書籍の購入がメインとなっていますが、同時に、中国においては、特に上海においては、蔦屋書店に代表されるリアルの本屋さん巡りの魅力も捨てられません。

以前、上海の図書館の魅力を紹介しましたが、実は、上海には魅力的な本屋さんが多数あります。最近では、私が本好きと知られてからは、中国人の同僚から新しい本屋さんの情報を教えてもらうことが増えてきました。今回は、上海の本屋さんを紹介したいと思います。

日本においては、1990 年代の終わりに 2 万 3000 店ほどあった書店は、2018 年には 1 万 2026 店にまで減少、ちょうど半減したといわれています。最近、友人のご両親が経営していた書店も閉店したというような便りを聞くと、この傾向は続いているのだと思ってしまう。

一方、現在、中国では書店ブームが到来しています。1970 年代頃までは、新華書店という国営の書店が、中国全土で 1 万店舗しかなかったといわれていますが、2019 年には、16 万店舗と過去最大になっています。国営の新華書店だけでなく、新しいモールや複合ビル内には必ずカフェスペース付きのおしゃれな本屋さんが入っていて、いつ行っても混み合っている状態です。

中国においても、インターネットや電子書籍の利用が日本以上に浸透している一方、新しい書店が生まれ続けています。しかしながら、中国でも、2002 年から 2012 年にかけて、国内の書店の半数近くが閉店する「本屋厳冬の時代」があった、といえます。その原因は、家賃の高騰とインターネットの影響でした。「書店でお気に入りの本を探し、ネットで、5 割引きで買う」という購入スタイルが普及、リアル本屋がどんどん潰れていきました。電子書籍の利用が一般化する中で、本屋さんの役割や実店舗の在り方は、中国において大きく変わ

りました。

従来の書店は、本を売る場所・買う場所でした。しかし、日本の書店も変わっているのだと思いますが、中国の本屋さんを見ていると、書店の役割が大きく変わっているのを感じます。つまり、書店は、たんに本を売る場所・買う場所ではなくなりました。

その様子を表すのが、「書店 4. 0」という言葉です。

- 「書店 1. 0」 (従来通り) 本や雑誌を売る
- 「書店 2. 0」 カフェを併設する
- 「書店 3. 0」 文房具や小物などの雑貨も売る
- 「書店 4. 0」 サービスを売る、文化を感じる場を提供する

個人的には、「書店 2. 0」と「書店 3. 0」は、入れ替えてもよいように思っていますが、中国では、先にカフェを売る場を設けるケースが多くなっています。その理由は、中国においても、やはりリアル書店で本はあまり売れていないからです。日本では新書本で 1000 円弱、単行本だと 2500 円前後することが多くなっていますが、中国では、まだまだ紙の本が安く手に入ります。単行本が 50～60 元 (約 1000 円) の定価で、ネットだと半額、さらに廉価本だと 7 割引きのようなケースもあります。そのため、「書店でお気に入りの本を探し、ネットで、5 割引きで買う」スタイルは変わっていません。しかし、輸入品で高級なイメージのあるコーヒーは、一杯 30 元～60 元 (500 円～1000 円) であるため、本屋でコーヒーを注文して電子書籍を読む、というスタイルが成り立っています。

中国の本屋さんは、本を買う場所だけではないこと。つまり、本屋さんは、新しい知的な空間、知を感じることでできる貴重な場所になっており、中国の消費者もそれを歓迎しています。

それは、電子書籍ではできないことであり、新しい書店の新しい役割だと思っています。

たとえば、

- ・自分の興味・関心外の本との出会い

電子書籍は、買いたい本を探すことはできますが、自分の興味・関心がない本の場合、たとえそれが自分にとって必要な本であった場合でも、目にする機会・手に取る機会がありません。

しかし、リアルな書店では、棚を眺めながら一巡する中で、その時々自分の関心事に関連する本に出会うことがあります。

- ・本のザッピングができる。

本の表紙を眺め、ちょっと気になる本を手にとって、数秒間、中身を見て確認することができます。

この数秒でできてしまうというのは、現在の電子書籍で、気になったらダウンロードして、しかも先頭のページしか見られない、というのとこの差は依然大きいと感じています。

- ・素敵な読書スペース

本の購入前後に、書店内の素敵なスペースで本を読むことができます。

- ・喫茶店の併設

日本以上に、喫茶店併設の書店が多いことと、本よりもコーヒー代の方が割高なので、喫茶の利益で儲けているように思います。ちなみに、中国あるあるですが、昼食代が 30 元 (500 円) くらいですませた場合でも、コーヒー一杯の値段が同じ以上かかります。

- ・読み聞かせ会・読書会

著者による講演会は、日本の丸善や紀伊国屋でもありますが、中国の書店にもあります。また、週末の午後になると、小さな子供をつれた家族連れが集まり、読み聞かせ会が開かれます。

- ・飲食店も併設

中国の飲食店で驚いたのは、レストランやラーメン屋さん等の中に、本棚があることが多いことです。

個人的には、自分の本でもない本が間近にあるので、本が汚れないか気になって落ち着かないのですが、中国の人は、知的な空間で食事ができることをお洒落と思っているんだな、と感じています。

- ・知的な空間を感じる場所

中国の比較的若い人にとって、書店は、たんに本を買う場所ではなく、本好きの人が集まる場所、比較的知的レベルの高い人たちが集まる場所であり、そこに身を置くことを喜びと感じているように思います。

ところで、とても美しく魅力的な中国の書店なのですが、日本人から見て、「こんなに無駄な空間が、なぜ成り立つのか？」という疑問です。

その理由は、こう考えています。1つ目の理由は、併設している喫茶店や飲食店の利益で経営が成り立っているから。中国の書籍は、日本と比べると格段に安い。単行本の相場が 30 元 (500 円) ほどであるのに対し、コーヒー一杯 30 元～60 元と割高になります。

これにデザートをつけると、70元～100元になります。実は、知的な空間を装うことで、本を売るよりも、喫茶店として儲けているように思えます。

2つ目の理由は、中国では毎年、500～600の巨大ショッピングモールが新たにオープンしています。このショッピングモールの経営者は、施設の「格」を上げるため、文化の薫りがする本屋を求めています。その結果、光に包まれた美しい書店や美術館と錯覚するような書店などが生まれています。この書店を誘致するため家賃の減免が行われているため、書店側としても本を売ることよりも、文化を感じる場を提供することに専念することができているのだと思います。

中国各地に出張や旅行をする中で、各街角にある本屋さんに足を運ぶのが趣味の一つになっていますが、今回は、上海の本屋さんを紹介します。

## 1. 上海書城

最初に紹介するのは、上海市内の中心部、観光スポットの外灘や豫園にもほど近い福州路沿いの書店街です。

「上海書城」は市内に数店舗展開されていますが、その中でも最も取り扱い書籍数の多い本店になります。7階建てで、上海最大の本屋さんなので、中国語の教科書や参考書を買う際に利用しています。2階のカフェでは、中国茶を楽しむことができます。



福州路沿いは、書店街といいましたが、足を運びたくなる書店が多数あります。外文書店、芸術書坊、古籍書店などです。

## 2. 外文書店



上海書城の対面にあります。「外文」という書店名のとおり、外国書籍を中心に扱う専門店です。最上階の4階には、日本のアニメや漫画を専門に取り扱う『松坂書屋』があり、いつも若い中国人女性が多いです。アニメ、漫画以外にも、文庫、文芸、コミック、雑誌、エッセイ集など、さまざまなジャンルの日本の書籍を2万冊以上取り扱っています。

## 3. 芸術書坊



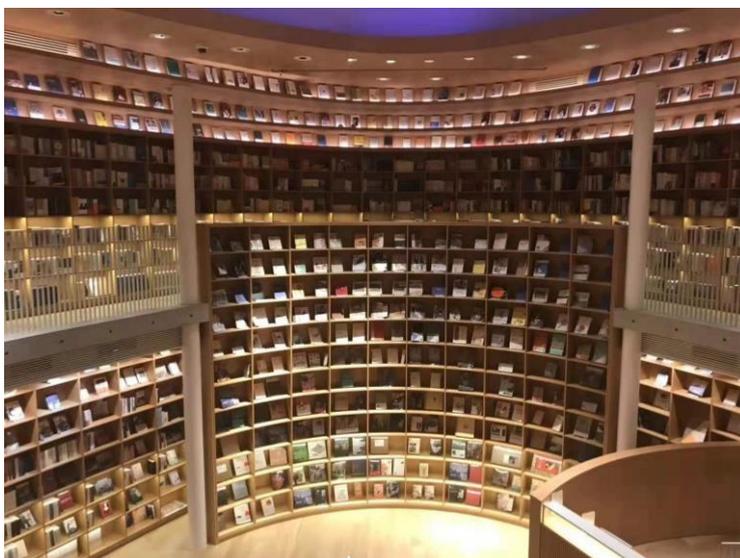
ここは、アート系書籍の専門店です。絵画、書道、篆刻などの専門書、入門書などが多数あり、眺めているだけで楽しいところになっています。

#### 4. 古籍書店



中国の古書、文化や絵画、書画に関する歴史史料を取り扱う専門店です。上海博物館に展示される文物の書籍もみることができます。

#### 5. 光的空間・新華書店



上海市内の西側、地下鉄10号線の龍柏新村駅の巨大ショッピングモール「上海愛琴海購物公園」の7階にあります。2017年末にオープンした、とても美しい西洋式の図書館のような雰囲気のある本屋さんですが、中国でも人気のある建築家・安藤忠雄さんが設計を手掛けた書店になります。安藤さんの建築物というとコンクリートの打ち抜きをイメージするのですが、ここは予想をいい意味で裏切る、木のぬくもりを感じる空間になって

います。延べ 1700 平米の書店の別名は「光的空間（光の空間）」と呼ばれており、店の中央奥には、(写真にある)「心庁（心のホール）」と名付けられた壁面を本棚が占め圧倒される空間があります。

書店名が「光的空間・新華書店」とあるように、国営企業である新華書店の経営であり、攻めている経営姿勢が伝わっています。

## 6. 明珠生活美術館



書店の名前に「明珠」とあるように、上海で一番有名なタワーである東方明珠タワーの足元にある書店兼喫茶店です。

周辺は金融センターであるため、顧客訪問の前後で利用すること多いですが、打合せ前後のひと時を、コーヒーを飲みながら、いつも静かで落ち着いて過ごすことができます。

## 7. 鐘書閣



地下鉄 1 2 号線の龍華中路駅そばにあります。一見、書店の入り口とは思えない、どこか中国の昔の家の扉を開けると、(写真にある) 光の空間が広がります。なんだかディズニーランドのアトラクションの中に入っていきそうな気持ちがある、とてもお洒落な内装の本屋さんです。

#### 8. 思南書局・復興中路店



会社近くの思南路にあるお洒落な本屋さんなので、昼食後、よく足を運んでいます。旅行関係の書籍が充実しています。この思南路沿いは、再開発されフレンチレストランやバーなど駐在員にとってお気に入りの店が多数あります。近くには、孫文の旧宅跡もあります。

#### 9. 作家書店



静安寺駅と陝西南路駅のどちらの駅からも徒歩 15 分ほどの距離にあります。日本人の出張者がよく利用する花園飯店 (オークラ・ガーデンホテル) からも近く、利用しやすい書店です。書店名に「作家」と名づけられている理由は、お隣が「上海作家協会」であるため。

多くの作家のサイン本も多数売られています。2階は、書棚に囲まれた喫茶店となっています。このメニューがとても面白いです。

たとえば、「ウイスキー＋コーヒー＝頭痛」「バナナ味＝一滴の秘密の涙」「輸入チョコレート＝上海・恋」などなど。いったいどんなものが出てくるのかわからない飲み物もありますが、とても面白いと感じています。

## 10. 大隠書局



淮海中路（ワイハイジョンルー）沿いでひととき目立つ建築物、「武康大楼」の1階にあります。武康大楼は 1924 年に建てられた歴史ある建物であり、旧名称は「ノルマンディーアパートメント」という名前から推察されるように、フランスの金融投資会社が、フランス人街に建てたものでした。対面に、孫文の夫人を記念した上海宋慶齡故居記念館があります。

（写真は）書店と思えぬ雰囲気のとおり、「大隠書局」という名前の由来は、「騒がしい上海で、まるで隠居するように過ごしてほしいんです」という店主の思いが込められた空間になっています。ここで美味しいお茶を飲みながら本を読んでいると 2～3 時間が、あっという間に経ってしまいます。

まだまだ紹介したい本屋さんはたくさんあります。機会があれば、また紹介させていただきたいと思っています。